



考く之を自画にわたり事と云ふ

菅丞相の肖像と画さく人なり

繪より事

菅原左大臣通貞云く菅丞相大權  
乃天神乃湯事之菅原左大臣時平云く菅丞相大權  
大臣に大改をほかきしりしに時平云く  
也智学又云く菅丞相に方量りしとそその  
之醜陋天皇甚く菅丞相の学也とせしは  
一六時平云く神とそ稱す後之と云ふ  
河上菅丞相と記す藤原流也

其時君と云ふて世乃人とも菅丞相に飛世  
事と云ふは菅原飛人とも云ふ菅丞相に飛人

まわまりく飛世流也

水野の神といふれりてちかきと神を流

是より飛人の飛人の方なく稱す所は

なりと肖像といふも画く多々の人なり

繪より事なり人とも飛人の像といふ

りて事なり大よおほやけと名なり自画

の像といふ繪より事なり一向の事

事なり

天神の面相と画くに若り乃色と歌しく  
名がふたつ、八段り成り

一 天神の面相若り乃色とわらひく若りく画ハ  
天平化、菅丞相無実の罪とあひ流罪あひあ  
し事と恨むいそしく深く傍りく常りあり  
清涼殿と唐く人とはく報しはると子孫流と  
傳とく思ひく面相とありたつ紙画うき菅  
丞相の人ごとくあひく思人の紙を流す相の生矣  
死矣乃人ごとくありてあらを物いとお所し紙あしと  
あれた事と天平化とある紙を流す況し多あひ

菅家後年とくし不書あり菅丞相筑紫流  
すは唐紙の時の詩と集えう物と書  
乃詩と見くにも恨むあり絵の詞と  
一句もつひ珠と結の中九月十日と云歌の侍に  
去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨断賜  
恩賜御衣今在此 捧持毎日并餘香  
と之多り世侍の心と去年昌泰二年九月十日今日  
と同日に清涼殿と侍所とに秋と思ふと不  
物とあり絵のに外の人と遠くを物獨の  
形、ほくまのりくさものと憤りく秋思事と

詩と仍りて  
情とてよ 詩とてよ  
かゝ給りて清和を才と持て今世に  
も此をよと持て清和の香の今世に  
わくとありて清和を才と持て今世に  
能を給ひて清和を才と持て今世に  
かゝるは一方一変とて清和を才と持て今世に  
水も清和を才と持て清和を才と持て今世に  
言はぬの事とて清和を才と持て今世に  
浦も清和を才と持て清和を才と持て今世に  
の事とて清和を才と持て清和を才と持て今世に

九月乃末

改官の解状  
人乃さえ清和を才と持て清和を才と持て今世に  
焉の志の清和を才と持て清和を才と持て今世に  
世文の心九月の末の清和を才と持て清和を才と持て今世に  
乃官と改めたる清和を才と持て清和を才と持て今世に  
清和を才と持て清和を才と持て清和を才と持て今世に  
あゝいあゝい清和を才と持て清和を才と持て今世に  
清和を才と持て清和を才と持て清和を才と持て今世に  
あゝいあゝい清和を才と持て清和を才と持て今世に



天神の像は紫束と云く紫束を画くハ志キ支  
 天祿の像の紫束と云く紫束に画くハ志キ支  
 と云ハ衣文と云付く麻布の大方の志キ支  
 身ハ紫束の下にカシヒク衣文ヲ付く肩の辺に衣  
 の臂の辺にカシヒク紫束の形ハカシヒク  
 リシト云く積りト云クカシヒクハ鳥羽院  
 死園方大臣有仁と云付カシヒク初メ繪ハ  
 此カシヒク世往相演神皇正統記梅人蔭苒少  
 見カシヒク菅原の時代ハ志キ紫束カシヒク  
 肩カシヒクカシヒクの辺にカシヒクカシヒク

一トヤト云クカシヒク御ハ画ク一ト云ク紫束の形  
 吾相院の法代ハ菅原カシヒク世の延元元年  
 此百十年斗リ後カシヒクカシヒク菅原カシヒク  
 此カシヒク紫束ハカシヒクカシヒクカシヒク  
 乃冠カシヒク巾子カシヒクカシヒクカシヒク  
 此カシヒクカシヒクカシヒクカシヒク

菅公乃像袍の色の変

菅家御傳記曰昌泰二年二月十四日為右大臣

此元寛平九年七月十三日  
 叙正三位見リ同記

世時正三位右大臣カシヒクカシヒクカシヒクカシヒク







弘仁延喜の制よりして一位と二位と帯よりか  
大長衣に深紫をえりて事

同記曰同閏十月十九日贈大政大臣

世傳藤正一位右政大臣に被上より

菅公の像に近以前に増官位より被上深紫之  
太宰権帥に任じ延喜の召薨より一日よりハ  
袍の文中紫也

深紫ハよもよもいひ如く紫色を極深くと云く  
ありたること云りゆはよ正曆の比より五倍に淡紫  
に似て深しき事なり  
桃花莖葉  
見一タリ 是に似たり

画上深紫の袍と云るよ大正をぬかりありあるハ  
思深にありたる以紫の袍の色ハよもよもいひ  
よも菅公の時より思深よせよ時の深紫の色  
よも少多よも一葉の色と云く之も思くぬかり  
ゆりてのりかきハ深紫の色よりよもいひん  
中紫といふ事又同一様心といひぬかり

袍乃文極の文

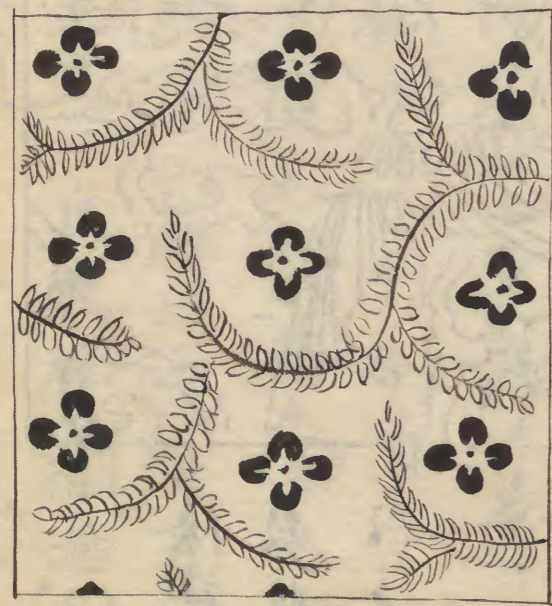
後代ハ袍乃文喪唐系輪座の之種乃にあり  
世外乃文ハ用りゆは是よりれ乃代に定られ支  
しや洋のよも又異文と号しよも家に定り用

多岐文もありとしかるに種々の定制ありと  
れは異文とも用ひぬむしき事ありとしかの二種  
公の定制ししわさうに按じしと上右しと文乃  
定制ありとわさうに按じしと上右しと文乃  
の定ありと又延喜律正しとれ後徳用<sup>イテ</sup>者位以上朝服  
六位以下得抜用と云定はわれしと文の定法は  
又内職部式<sup>イテ</sup>種々の後乃者人<sup>イテ</sup>これ世後<sup>イテ</sup>し  
袍と制ありと上事ハ<sup>イテ</sup>又唐唐草<sup>イテ</sup>輪<sup>イテ</sup>輪<sup>イテ</sup>透<sup>イテ</sup>  
雲雀等の衣ハ<sup>イテ</sup>も亦<sup>イテ</sup>云妙く上右ハ<sup>イテ</sup>六位以上の  
朝服ハ<sup>イテ</sup>後と用ひ六位以下ハ<sup>イテ</sup>後と禁ありとの別あり

位ありとあとの別ありと二の制度のさう  
文乃制友ハ<sup>イテ</sup>亦<sup>イテ</sup>一國史とも<sup>イテ</sup>後<sup>イテ</sup>の制友<sup>イテ</sup>沿革ハ  
え<sup>イテ</sup>多岐も<sup>イテ</sup>袍<sup>イテ</sup>の文乃<sup>イテ</sup>制度と<sup>イテ</sup>建<sup>イテ</sup>れ<sup>イテ</sup>事<sup>イテ</sup>見<sup>イテ</sup>え<sup>イテ</sup>  
指とく上右と<sup>イテ</sup>袍<sup>イテ</sup>の文ハ<sup>イテ</sup>定<sup>イテ</sup>ま<sup>イテ</sup>或<sup>イテ</sup>ハ<sup>イテ</sup>亦<sup>イテ</sup>用<sup>イテ</sup>せ<sup>イテ</sup>人  
の好<sup>イテ</sup>し<sup>イテ</sup>用<sup>イテ</sup>せ<sup>イテ</sup>何<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>用<sup>イテ</sup>ひ<sup>イテ</sup>く<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>物<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>用<sup>イテ</sup>ひ<sup>イテ</sup>  
も<sup>イテ</sup>一<sup>イテ</sup>成<sup>イテ</sup>之<sup>イテ</sup>一<sup>イテ</sup>さ<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>菅<sup>イテ</sup>家<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>像<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>袍<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>ハ<sup>イテ</sup>何<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>  
画<sup>イテ</sup>一<sup>イテ</sup>何<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>と<sup>イテ</sup>ハ<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>摘<sup>イテ</sup>め<sup>イテ</sup>る<sup>イテ</sup>は<sup>イテ</sup>ヨ<sup>イテ</sup>リ<sup>イテ</sup>亦<sup>イテ</sup>と<sup>イテ</sup>尋<sup>イテ</sup>ひ<sup>イテ</sup>く  
画<sup>イテ</sup>一<sup>イテ</sup>何<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>と<sup>イテ</sup>ハ<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>菅<sup>イテ</sup>家<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>像<sup>イテ</sup>ハ<sup>イテ</sup>藤<sup>イテ</sup>四<sup>イテ</sup>葉<sup>イテ</sup>草<sup>イテ</sup>  
乃<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>と<sup>イテ</sup>画<sup>イテ</sup>り<sup>イテ</sup>是<sup>イテ</sup>昔<sup>イテ</sup>より<sup>イテ</sup>文<sup>イテ</sup>物<sup>イテ</sup>と<sup>イテ</sup>く<sup>イテ</sup>け<sup>イテ</sup>画<sup>イテ</sup>ハ<sup>イテ</sup>亦<sup>イテ</sup>あり<sup>イテ</sup>と  
云<sup>イテ</sup>光<sup>イテ</sup>長<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>画<sup>イテ</sup>一<sup>イテ</sup>年<sup>イテ</sup>中<sup>イテ</sup>以<sup>イテ</sup>来<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>繪<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>十<sup>イテ</sup>六<sup>イテ</sup>卷<sup>イテ</sup>の<sup>イテ</sup>中<sup>イテ</sup>も<sup>イテ</sup>袍<sup>イテ</sup>の

文に藤子四葉草ありしと云り古画如野道風像青蓮院  
門海にと藤子四葉草の文を画り西工の君像の  
 冠袴の形多羽院以前詳ありの像より時の  
 古画に威儀を古画又雲帯の後始あり  
 文徳天皇の古画の清和天皇の  
 後と藤む中中藤敏内侍の事大祓物  
 記にあり雲帯と雲鶴の事記何事と云りや  
 此の事ありしと云りしに補ふは長六年藤  
 原左衛門尉人補ふと藤正通と云りて補ふ  
 詩に後宮衣同舞霓風中於文粹羽衣  
集等とありと云りて袍の雲鶴

と指してまづて菅家乃像と云鶴と画く事いふ  
 と云わ  
 藤子四葉草の両様



右年中行支繪

右古画小野道風像

雲鶴の図



後祥合院  
教家宗妙  
一之身

右藤四葉草の文、繪所古儀家乃旧傳也  
此の圖家の左  
実と更傳はく  
 雲鶴ハ古分より之の文より世兩儀の中好  
毎画より之  
の四より  
 じ下より傳せり河津とも画へ

袍の袖長の丈

一 拾叢抄に一條院長保元年袍の袖の潤一尺八寸あり  
 同二年一尺二寸あり 是見くより其の長より後より  
 鳥羽院湯代衣文と云事始り以來其長くあり  
 考より今ハ二尺修りに成りより上其の長より  
 統目申記に元明天皇和銅元年八月制自今以後  
 衣標口潤八寸已上二尺以下隨人大小為之云又拾叢抄  
 云袍袖口潤五位以上一尺為限六位以下八寸又准此  
 於裕雜室重二年又延喜彈正式云凡衣袖口潤無間高  
 正月七日  
 下同化一尺二寸已下其腋潤者一尺四寸其表衣長



初めの事ぬく一さきハ菅家の後には御座少  
斗り地よりぬく御は画く他一長と事ぬく  
画くす一さき

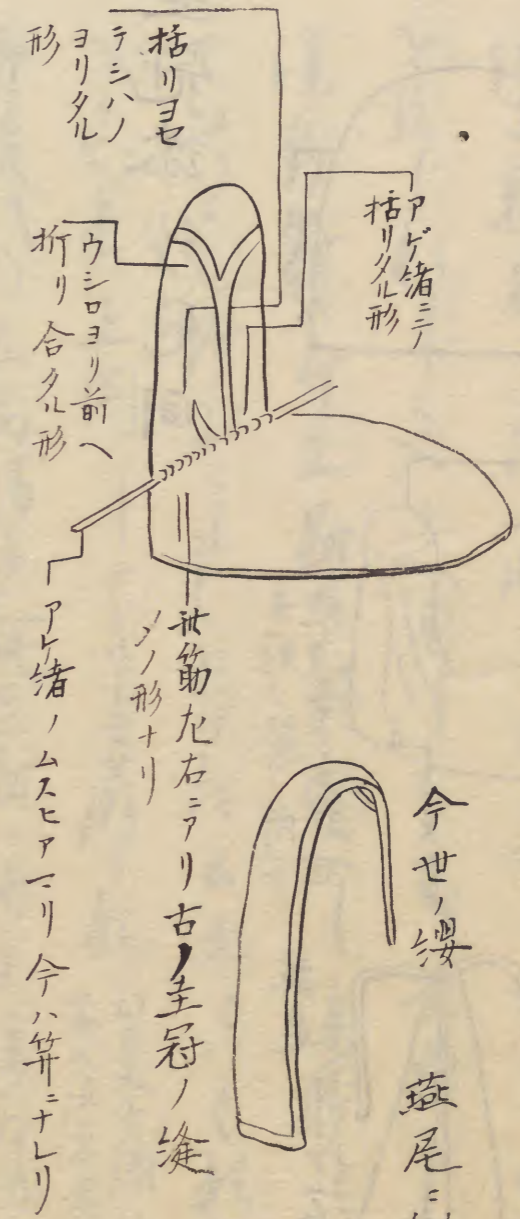
冠の事

一今乃冠ハ御くくしうめまににて衆とまきて引ぬり  
きものぬく又ぶくして頭入ハハ明裁と重く又由子  
も高き一て并と事たり古の冠ハ一と事ハ今ハ  
如く冠も鳥帽子と固くするハ鳥羽院御代  
文と一と事ハの始り一日本ハ事ぬく一は少御云  
物事ハ<sup>目</sup>ひけは一と事ハ物ハ雨のつくとぬ

日らしきハ馬ハの事ハ一初御ハ一人のぬくも  
いけハ一と事ハぬく一もいハ一と事ハぬく  
いハ一と事ハぬく一と事ハ冠ハ一と事ハぬく  
ぬく一と事ハぬく一と事ハ冠ハ一と事ハぬく  
冠ハ一と事ハぬく一と事ハ冠ハ一と事ハぬく  
人ハ一と事ハぬく一と事ハ冠ハ一と事ハぬく  
き一と事ハぬく一と事ハ冠ハ一と事ハぬく  
初ハ一と事ハぬく一と事ハ冠ハ一と事ハぬく  
年六月壬戌朔丁卯男女結髪仍著深紗冠云々  
同十三年閏四月壬午朔丙申紹男子有圭冠冠而



今世ノ冠ニ古ノ圭冠ヲ括タル躰ヲ在セル図



今世ノ纓  
燕尾ニ似ス

又此に似る一ヒキ古画小野道凡の像と云く古の  
尾飾と考へ見ると  
本図大ナリ今  
約シテ小クス

青蓮院御門跡所藏古画小野道風像





衣よのし妙くうまくく菅く云け像の冠上衣圭冠と接す  
く着たる御画く一一今世の冠画す一一

平緒の事一

一 今世の專切り平緒と用切平緒と云六無の別緒り  
てさきもあま古六統平緒之統平緒と云六無の別緒り  
すて緒の緒りと長く一前に穿れ下ひり  
と緒の緒りに花鳥草木の繪と繡一てさ  
緒の色糸とひく文と作く上刺とひくいよの糸  
に同一今の糸の上刺上下下衣もにあり衣は  
衣中にあり記別徳野新宮の神室の中衣

古平緒り衣はく上刺りと上下下衣はく  
地乃色の淺紅とて繡の唐草かつ死之緒とひくに  
て端は菘黄糸と文とり衣の上刺の菘黄糸の緒  
と中は菘黄糸の像と六統平緒と画一無の二ツ  
と多うりたる糸と画とをひく平緒とり也一

太刀の事一

一 衣乃武官にありる人の帯と衣之文衣にも勅  
授布乃直下りと帯と菅云六寛文年九年  
六月十九日任権左衛門右兵衛尉品祿二年二月  
十五日任衣右兵衛尉如える水と菅云一一



乃神も亦為の神も画一前社に其の方も少甲高に  
ありしと舟も交れ六位以下の前社と云ふ前の方  
と少中宮に肉と縁をの成一前社と前社と云  
表裏もいふも一海に性も多  
望テ以テ云あつきの其の繪に畫云  
皆の事

一菅公席上に立ちし像あり襪をうりよと皆とは  
画一と又曰く坐しし像ありは丈六法也  
画一又二辰ハ每是ラ  
前テ能クナリ世時と襪あり画一又座上  
立ちし像ありは襪の上には油皆と画一  
菅公相面神の事

一凡女人の像一人の生る時と云ふ字一画ありは遠  
小形なりと云ふ死しては家後世画より云ふ一  
御と云ふ其人在世乃同乃徳儀行跡を付く若子小人  
若人悪人相成に面神と画一菅公ハ文徳有  
道乃賢人よそ若子の系象り人よそおハ一  
りとも顔色いとも赤松して威有りて猛りし中  
り多し画一一年卒條歳らりしに面かうに肉  
置とて繪も終り少白髪文一終と画一  
肩と画一と云ふ畫と云く是れも男の像と云り  
肩とぬす法袋と付るハ鳥羽院の世より始り

中海人唐友よえへり是後代好まの惣風流也  
多明院法代筆初よいあさのし鑑画よは唐云云突  
乃飛くくた近きわとて極く懐りく雷よあり  
くひくくよ多岐と伝て唐云の歌と怖り  
く服と大に目撃し瞳子と伝りわけ畫と云云  
思ひの色と歌いや小人思味乃人ありき  
らよ比して君子の心を知るもくわき  
事と伝り出してし傳多と文て画ハ  
湯うし世に唐云の自画の像とよ物も衣乃  
如く画りわ後人の傳画の伝きあり

渡唐天神の像の變

一 渡唐乃て神の像とよ物あり唐云唐(海)の

事、曾てか一聖一國仰筑紫博多居候人て後玉  
仰乃居位乃跡とて地一衣と地出たるに聖とて神  
との物傳と云付くなり天神之祇尚弘法と傳授也  
よと云聖一之息傳ハ徑山寺に法と宗は我師ハ徑  
山寺にりりとも又我師物く法と年一とて天神  
師ハ渡唐一と無準に法と受く傳の衣裳と云く  
栴乾一枚と携く茶氣聖(相見)く無準ハ法と  
文う中と傳り事不二自候ふ是と書記より東福

悪徳と娯楽を記さう又惟肖のて祇の質云祇と世変  
不審方とて他海に記して並水多水せぬに  
位とて質とて云羅山定東史記よ之有り衣の天  
神渡居しく弘法と史書をくい一事の衣に記  
して何をしとて事ハ例乃僧乃安飲るう位とて  
に多し凡僧ハ奇妙不思像と好ま安次と像下歌  
くある)

菅家の像天神の像と云々

一 任衣慶舟云云依画工乃家とてハ菅公存生の時の像とハ  
菅家の像と云薨後北野に祭られくい一像とて神

乃像とてく是もも何とて事とて予ハ天満大自  
在天神と云祇とて名とてく是もも夫上長ハ表にハ  
わはつとて云是天神有り長とてはくははと云是  
地神とて此の祇とてく君臣の尊卑と分ててハ菅  
公ハ長之何也て林の位有りや予ハ祇とて菅神と云

安永九年庚子十月廿六日燈下書年

伊藤平藏貞丈述